

2019/07/21

「幸福論」

人は皆幸福になることを求めて生きています。「幸福」とはそもそも何でしょうか。「幸福とは生である。生を中心は愛である。」と言われます。

では、「あなたの心の中心には何があるか。」と問われたら、あなたはいったい何と答えるでしょうか。

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」(マタイ 6:33)

人間の心の中心にあるもの、それは愛です。子どもを愛する人、出世を愛する人、お金を愛する人、あるいはその人なりの目標を掲げてそれを大切にするという愛もあります。いずれにしても、人は何かを愛し、大切にし、それを守ろうとして生きています。そこに幸せがあると思ひ、自分の居場所を見つけようとしています。

心理学では、「愛」とは「関わり」であると定義されます。人間の中心に愛があるということは、人は何かと関わろうとして生きているということになります。何と関わることを自分の安らぎとし自分の居場所にするのか、何と優先的に関わるのか、自分にとって大切なものは何か、それが幸福論ということになります。

ところで、私たちが愛する対象には二種類あります。ひとつは永遠なるもの、もう一つは、有限なるものです。つまり、神を心の中心に持ってきて、神との交わりを求める生き方と、有限なるものを求める生き方があり、どちらを求めるかは自分で選択できるのです。これらを、それぞれ「真の生」「見せかけの生」と呼びます。

愛の対象を神にした場合、神には普遍という性質がありますから、愛する対象が永遠に変わることがありません。そもそも私たちの中心に愛があるのは、人が神に似せて造られたものだからです。神は愛です。愛とは関わりのことです。ですから人間は何かと関わらなければ生きていけない存在なのです。その関わる対象を神にした場合、つまり、「真の生」には愛するものが変わらないという特徴があります。

それに対し、「見せかけの生」は、常に対象自身に変化して変わってしまいます。子どもを自分の中心にしても、子どもは成長し変わっていきます。車を愛しても、時の流れと共に車は古くなり変わっていきます。見えるものは常に変化し、過去のものを使い尽くし、常に新しく変わっていきます。つまり、死を繰り返しているのです。これが「見せかけの生」の特徴です。

■なぜ見せかけの生を求めるのか

この世では、誰もが見せかけの生から始まります。人が見せかけの生を求める理由は、私

たちの魂が、本当の関わる対象である神を知っているからです。しかし、この世界では神が見えないため、その影を追い求めます。この地上で神の影とは、自由であり可能性です。このような影を追いかけ、幸せになろうとするのが、この世では一般的な生き方です。

しかし、見えるものに幸せを見出そうとして生きていくと、ある人はそこから神に行き着きます。見せかけの生から始まって真の生にたどりつく人は、どのように移行しているのでしょうか。

まず、人は生まれた時、この世界に幸福があるに違いないと考え、見える世界の何と関われば幸せになれるだろうかと考えます。そこで手近な関わりを求めて、おもちゃを手に入れます。こうして人は関わる相手を見つけ、幸せを手に入れました。しかし、今も昔と同じおもちゃで幸せを覚えるかというところではありません。おもちゃとの関わりで手に入れた幸せは長くは続かないのです。そこで、人はおもちゃを取り替えて生きていきます。

そうこうしているうちに、自分に何ができるかという可能性を見出し、人は自分の努力を満たすことで幸せになろうとするようになります。子どもは、競争し一番になることを求めます。勉強、運動、音楽、芸術など、努力が満たされる対象を探し、それで幸せになれるという関わりを求めようになるのです。しかし、努力が達成し目標のものを手に入れた時、私たちの心の中に自問自答が生まれるのです。「あなたは幸せか」と。

その質問に、人は無意識に答えます。「幸せじゃない。」

努力して目標のものを手に入れても幸福感は一時的あることに気づくと、次に人は環境を変えることによって幸せになれると考えるようになります。「私が幸せでないのは、この家のせいだ」「この国のせいだ」「職場のせいだ」と考え、新しい環境に移ることで幸せを手に入しようとするようになります。しかし、やはり、しばらくすると依然と同じ憂うつが戻ってきて、「あなたは幸せか」という自問自答が始まるのです。その質問に対して、私たちは無意識に答えます。「何かがおかしい。」

様々なものを手に入れても幸せではないと感じて、やがて人は、高みにのぼれば幸せになれると考えるようになります。しかし、努力して頑張っても高みにのぼっても、やはり「幸せではない」という憂うつがこみ上げるのです。むしろトップに上り詰めることによって、以前にも増して憂うつになります。

このことを実際に体験した人の書いた書物があります。それが「伝道者の書」です。

これを書いたソロモンは、当時の世界で最も強い国を作り、金持ちになり、高みを目指して頂点に立ちました。そして彼は言ったのです。「空の空。」「すべては虚しい。」

欲しい物はすべて手に入れたはずなのに、いざ頂点にのぼってみるとなんて不幸なのか、こんなはずでなかったと、虚しさがこみ上げてきました。そこで、彼は自分の間違いに気づいたのです。

このように自分の間違いに気づける人は幸いです。多くの方はそれに気づかず、「あの頃は良かった」と過去を顧みるようになるのです。結局、何を手に入れても虚しいものであり、幸福などないのだという結論に行きつくのです。「何を手に入れても虚しいのだから、無駄な努力はやめよ。それが人生だ。」という教訓を得、最終的に自分のお墓に幸せを求めるのです。お墓についての考えはヨーロッパとアジアではだいぶ異なりますが、一般的にアジアでは生

まれ変わって幸せになれると考え、自分が死んだあとも、子孫が墓参りに来てくれて墓を守ってもらうことに幸せを求めるようになります。こうやって人は幸せを追いかけ、人生を終えていくのです。

■放蕩息子は何を求めていたか

なぜ幸せを求めているのか、なぜ自分の中心に愛があるのか、多くの人は気づかないまま人生を終えてしまいます。

イエス・キリストは、私たちの中心には何があるのかを教えるために、「神の国と神の義を求めよ」と言っておられます。このことを教えている最も有名なたとえ話が「放蕩息子」のたとえでしょう。

金持ちの家に生まれた青年が父親から財産を分けてもらって家を出る姿は、神の国から離れてこの世に生まれてきた私たちの姿と同じです。私たちの魂は神のいのちによって造られたので、魂は神を知っています。だから、神の見えない世界に生きていても、魂は神との関わりを求めます。そこで、人はこの地上で幸せを探す旅を始めるのです。

父の元を離れた放蕩息子も、財産を使い果たして、どこかにある幸せを探す旅に出ましたが、それを見つけることはできませんでした。どこに幸せがあるのかという疑問を持ちながら、おもちゃ、競争、環境を変え、高みを目指して生き、ついに最後は、お父さんのところにいた時は幸せだった、お父さんのいる場所が幸せの場所だったと気づくのです。そして、この青年は、お父さんのもとに帰ろうと決心しました。

私たちはいつまで放蕩を繰り返し、いつまで自分の中心を他のものに譲ったままでいるのでしょうか。私たちの中心を神にしない限り幸せなどないのです。私たちの生は愛であり、その愛に、幸せの原点となる神がいなければ、何をやっても満足を得ることはできず、幸せではありません。結局、幸せを探しても手に入れられないので、お墓に期待するしかなくなってしまうのです。

このたとえ話の青年は、このことに気づき、父のもとに帰る決心をしましたが、その時は自分の罪を告白して罰を受ける覚悟でした。ところが、お父さんは一切の罪を問わず、罰を与えなかったのです。ただ彼を抱きしめ、彼のために宴会を催したのです。これが神が私たちに対してなさることです。

結局のところ、私たちは愛されることを求めており、幸せを求める旅は、無条件で愛してくれるところを探していました。

父なる神は、あなたを無条件で愛しておられます。あなたが神のもとに帰るなら、神はあなたを無条件で受け入れられるのです。そのことを体験するために、あなたの罪を言い表してごらんさいと、イエス・キリストは語ります。私たちが神の前にすべての罪を言い表す時、神は平安を持って私たちを抱きしめてくださいます。こうして神と本当に出会うことができたなら、二度と自分の中心を他のものに譲りたくないという生き方になるのです。

今、あなたは何を第一にしているのでしょうか。それは、この質問をすればわかります。「あなたは幸せですか。」

もし、見えるものを中心に生きているならば、「幸せです」とは言えません。見えるものは変化するので、そのたびに一喜一憂します。変化するさまが良ければ幸せだと言ひ、悪ければ不幸だということになります。多くの人が、こうして自分が生きる生を勝手に決めつけています。しかし、私たちが生きる生は、愛だから幸せなのです。生きていること自体が素晴らしいことなのです。なぜなら神と関わりができるからです。私たちの中心は神であり、神と関わる時幸せになれるのです。これが、神が私たちに教えてくれている幸福論です。

あなたは自分の中心に何に置いているでしょうか。もし、神を中心に置くというのなら、つぶやかず神を信頼していきましょう。そして神に感謝して生きましょう。だから神は、「神を愛しなさい」という戒めを与えられたのです。

『心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これが第一の戒めです。そのように人は造られていて、見えない神を心の中心に持つとき、私たちはその旅を終えるのです。私が求めてきた関わり、私が求めてきた幸せはここにあったのだということにそろそろ気づき、惑わされず、それをしっかりと心の中心において生きるべきです。

イエス・キリストが語られた『神の国とその義とをまず第一に求めなさい。』という言葉には、その思いが込められています。見えるものを心の中心に生きていては、いつも心配が耐えられません。神を中心に生きていきましょう。